

## 巻頭言 総合と研究

聖学院大学総合研究所副所長  
聖学院大学大学院特任教授

関根清 三

聖学院大学総合研究所は、(一)文化、(二)心理福祉、(三)教育、三つの研究センターを総合したものである。さらに(一)は神学、日本文化学、(二)は人間福祉学、スピリチュアル・ケア、そして(三)は児童学、コンプライアンス、等々の研究グループを総合したものである。それぞれの専門に分化しながら、それらを総合する研究の意義は、二一世紀に入ってますます増大しているように見える。

この点に関して、我々の近いところで、土方透教授の目の覚めるような優れた論考がある(「老兵死なず——31年目の聖学院大学」当研究所 NEWSLETTER Vol.28, No.2, 2018 巻頭言)。教授は一方で、二〇世紀後半からポストモダンの真理相対化、価値多元化、根拠隘路化の議論に疲弊した知の営為が、個別のフラグメントに分化することを余儀なくされ、二一世紀に入っても「役に立つか／立たないか」の二分法で査問されることが常態<sup>デフォルト</sup>となった大学の危機を指摘する。しかし他方、それでも「役に立つか／立たないか」という問いそのものを、その背景と根本から問い直す、超<sup>メタ</sup>営為としての

学問の必要を、切実に訴えるのである。

では「問いそのものを、その背景と根本から問い直す」とは、どういうことか。それは、有用性そのものについて哲学的に斬り込み、総合的に吟味することと言い換えてよいのか否か。教授に触発され、その驥尾に付して、ここではそうした「総合」に関わる具体例と意味とを、古今東西の歴史から三つの古典に探ってみたい。

まず想い起こされるのは、学問発祥の地の一つ、古代ギリシアのソクラテスの事例であろう。プラトンの『ソクラテスの弁明』によれば、ソクラテスの友、カイレポンはデルフォイの神殿に赴き、「ソクラテスより知恵のある者がいるか」との問いを発した。巫女は「そのような者はいない」との神託をもって応えた。しかしソクラテスはこの神託自体を問いに付したのである。神が嘘を言うとも考えにくい。しかし自分は知恵ある者ではないと自覚している。この神託は果たして正しいのだろうか。ソクラテスは敢えてこの点を問い返したわけである。

ここでソクラテスは更に、カイレポンの問い自体を問いに付したと言ってもよいかも知れない。当時のアテナイは、クリティアスを頭目とする三十人独裁制をアニュトスが倒して民主制を回復した時代だった。しかしアニュトスはソクラテスがクリティアスに近いことを疑っていた。アニュトス派のカイレポンもソクラテスへの反感が増すようにと、こうした問いを巫女に投げかけたのではないか。そうした問い返しを秘めつつ、ソクラテスはさりげなくカイレポンを「友」と呼び、自分はクリティアス派などではないとの「弁明」をしているとも読めるのである。

しかしより直截には、ソクラテスは「知恵がある／ない」とはどういう意味か、そのことを根本的

に問い直したのである。そして彼は、世に知者の声名高い政治家、詩人、手工者を訪ね問答を試みた。その結果、彼らが政治、詩、技術といった個別の専門分野について知っているからといって、善や美といった価値についてよく知っているわけではないことを確認した。専門の知識があるからといって、倫理的な善等の価値の出自と根拠についても知っているかに思いがあって、利いた風な口を大きくとは片腹痛い。自分はそれに対し、例えば善について本当の意味で体系的に根拠づけることができな。その限り善について無知である。そのことを知っている。とすると己の無知を知っているというこの一点において、確かに自分の方が知恵ある者なのかも知れぬ。

ソクラテスはこのように、問いそのものを問い直すことによつて、いったん疑った神意を理解した。その後はその神の助力者として、知者を自認する者を見つけては、様々な価値とその根拠を総合的に問う哲学的問答を仕掛け続ける生涯を送った。そして、それらについて自身を含め人は誰でも無知であることを謙虚に知る社会の構築のために、命をささげると至つたのである。哲学の黎明期に、爾後の総合的に吟味する学の根本を見据えた、こうした働きがあつたことを、我々は忘れてはならないはずであろう。

第二に想起したいのは、西洋近代の J・W・v・ゲートである。しかも文学者としてではなく自然科学者としての業績、『科学方法論』の事例。土方教授の論考が、二〇世紀から二一世紀への転換期のパラダイム・シフトを問題とされてきたように、ゲートもここで一八世紀的思考の限界を指摘し、一九世紀の新たな課題が何かを問う。彼がこの書、なかならず「分析と総合」という一章において、問いの俎上に載せるのは、V・クーザンの『哲学史講義』である。クーザンは、一八世紀の学問の成

功が、早まった総合、すなわち仮説に対して用心深く、ひたすら分析に専念した点に起因するのではないか、と問うた。それ対して、ゲーテはこの問い掛けを問いに付し、そもそも分析とは何か、何らの総合も根底にないところで分析だけに従事するならば、それはダナオスの娘たちのように、全くの無駄骨を折っているに過ぎないのではないかと批判した。冥府で穴のあいた甕に水を満たす永劫の罰に服している、あのギリシア神話の娘たちである。これに代えて、一九世紀を、分析だけでなく、総合の世紀にしようとゲーテは提言したのだった。I・ニュートンの光の分解と偏光を「誤った総合」と批判するなど、その批判には誤解も含まれていたとはいえ、分析一辺倒の常識を問い直し揺さぶって、総合の意義を高らかに唱えた点に、形態 (Gestalt) よりも形成 (Bildung) を重視する形成学 (Morphologie) の主張と共に、ゲーテの自然科学者としての独自の地歩が認められるはずである (因みに、後の解剖学者F・ブルダツハの用法と混用されてゲーテの Morphologie も形態学と訳すことが一般だが、ゲーテの文脈では形成学の方が相応しいはずである)。ここで重要なことはやはり、問いを問いに付す姿勢、そして総合を終の課題とする視座であると言えるだろう。

もう一つだけ例を、我々に近いところで、日本近現代のキリスト者に求めたい。内村鑑三である。彼は伝道者であり、社会活動家でもあった。しかし何より、後半生三〇年にわたって毎月執筆刊行した雑誌の名前にあるとおり、『聖書之研究』者であった。聖書テクストの歴史的批判的な分析を能くしたばかりでなく、しかしそうした釈義の方法そのものの妥当性を問い返し、年齢を重ねるとともに益々深く、聖書の哲学的な読み開き、総合的な意味の探求を敢行した学者だった。

例えば旧約聖書の冒頭の一句「元始に神、天地を創造り給えり」について、一語一語註釈を加える

（「創世記第二章第一節」）。《「神」とは、『出エジプト記』三章一四節の「在りて在る者（I am that I am）、無窮の實在者」であり、「天」とは、「月と日と太陽系に属するすべての遊星」から、「オライオン、プライアデス其他諸の星座」に至る》云々といったように。

しかし晩年の「神に関する思想」では、客観的な語義の説明で聖書の真義を捉えたことになるのかを問い直し、敢えてスピノザ的な汎神論哲学を援用した主体的で総合的な読解の可能性をも探るのである。《有神論では、神は造物主、宇宙はその被造物として分離される。しかし汎神論によれば、神は宇宙の靈的側面であり、ふつう宇宙と呼ばれるものは、宇宙の物的側面である。神と宇宙は分離できないのではないか。神は人と同様、靈的側面と肉的側面を有するのであり、前者が宇宙に充滿する神の靈であり、後者がいわゆる宇宙にほかならない。とすると宇宙の万物は、人も、動物も植物も、或いは鉱物も、そして日月星辰に至るまで、全て「神の子」と称して間違いではない。そしてこれは、「我等は神の中に生き、動きまた在る」（『使徒行伝』一七章二八節）とした、使徒パウロの思想とも呼応するのではないか》云々といったように。

ここでは、聖書のテキストの語義を客観的に分析するとどうなるかといった聖書学の伝統の問いに応えつつも、その問いそのものを、その背景と根本から問い直す作業が敢行されている。すなわち、客観性そのものについて斬り込む、土方教授の言われる「超<sup>メタ</sup>営為としての学問」へと、換言すれば、汎神論や哲学を援用しての主体的な総合へと、眼差しが向け直され、そちらへと焦点が定められていく、その見事な事例がここに確認されるのではないだろうか。

以上、土方教授の考察に触発されつつ、総合研究所の「総合」という言葉の意味を求めて、思考を

めぐらしてきた。最後に「研究」についても一言ふれて終わりたい。

いま先行研究との対応の仕方に着目するならば、研究にはディベート型、ディスカッション型、ダイアログ型の、少なくとも三つのタイプがあると言つて大過はないだろう。

古フランス語の *debate* に由来する英語の *debate* は、「打つ」ことを意味する *bat* に強意の *de* がついた言葉で、間違つた解釈を打ち負かして黒白をつける「討論・論争」を意味する。また *discussion* は、ラテン語の分離を意味する *dis* に「揺さぶる」の意の *cuss* がついた言葉で、もとは言葉を揺さぶつて常識的な事柄・事実をいったん粉々にした上で、一つの結論を分離して出す「審議、議論」を指す語である。それに対して、ギリシア語の *διαλογος* (*dialogos*) に由来する *dialogue* は、「色々な人々の間を横切つて *δια* (*dia*) 話す *λεγω* (*lego*) こと、つまり、話し合う、考えを交わす、「対話・意見交換」を意味する。ここではディベートのように黒白をつけることが眼目ではなく、またディスカッションとは異なり、むしろ魂の事柄・真実に関して、特に一致した結論に至らない地平に敢えて留まるところに、その真骨頂がある。

何故そこに敢えて留まるのか。それは、魂の次元の絶対の真実を仰望しつつも、この相對の世に棲み、相對の頸木を脱し得ない人間の言語でそれを描くことに過ぎない我々の語りの営みが、そうした自己相對化を我々に強いるからにほかなるまい。そればかりではない。自己的相對的な管見を意識するからこそ、予想し得ない他者の知見を知り、たとい大小深淺の違いはあるとしても、それらが互いに交わり響き合うことをこそ喜び楽しむことへと、我々は促されるからではないか。

「老兵」でありながら、本学では新参者の私は、昨春初めて、総合研究所の「二〇一八年度第一回グローバルゼーションと日本文化研究会」（研究代表：清水正之総合研究所長）で発表と質疑応答に

参加させていただく機会を与えられた。その際感銘を受けたのは、そこに勝義のダイアログの精神が横溢していたことである。それは勿論、学問的で厳しいデイベイトを排除するということでも、一義的に定まる事柄についてディスカッションを避けるということでもない。だが研究会の場を主導していたのは何よりも、ダイアログの響き合いを楽しむ精神だったのである。この精神に導かれて現出する豊かな世界こそ、研究の醍醐味の一つであるに違いない。陰に陽にそうした研究会での発表・対話の中から生まれた諸論考の集成であるこの『総合研究所紀要』もまた、現在の研究者同士の、また過去の研究史との、批判的対論を踏まえ、また論者同士の将来に開いた可能的な、ダイアログの宝庫であることを確信し、またそうなることを冀願してやまない。

そして今回この巻頭言を執筆するに当たって、同僚であり本学の先輩である土方教授の御論考に接し、拙いながらも思考を刺激され、及ばずながらもダイアログを試みる事ができたことは、望外の幸せであった。改めて深甚の謝意を表しつつ、また拙文がひよつとすると更なるダイアログを惹き起こす切っ掛けとなることも祈念しつつ、ひとまずここに擱筆する。